

# 「2国家共存」思想 — 起源、生成、発展の歴史 — 中東百年紛争史（連載第5回） —

## Challenges Facing the 2state – Solution for Palestine

森 戸 幸 次

### 要約

19世紀末以来、パレスチナを舞台に繰り広げられてきたユダヤ人とアラブ人による中東百年紛争。どちらかの民族的な立場に立って考える限り、解決の糸口は見い出せない。双方のナショナリズムをいかに乗り越えるのか。イデオロギーを超えた、お互いを認め合う実存的な解決を希求する「解」＝「和解」を探求する「2国家共存」思想の起源、生成、発展の歴史を辿りながら、イスラエル、アラブに求められる選択の可能性を考察する。

### キーワード

共存思想、イサム・サルタウィ、主権、独立、尊厳、アラファト語録、「我々は、ある一つの立場に立って探求する。しかし、その立場に立って考える限り、その立場では解決しえない現象、限界に逢着する。これをいかに克服するかを考えることにより、さらに一層具体的な立場に移る。こうした矛盾への逢着とその解決という過程こそ、真の学問的探求の精神である」(弁証法)<sup>1)</sup>

「パレスチナには、土地を所有している民族を追放したり根絶でもしない限り、第二の民族に提供する空間はない」(ジョージ・アントニウス<sup>2)</sup>)

「パレスチナの22%に相当する西岸・ガザ地区に東エルサレムを首都とする主権国家を樹立してイスラエルと平和共存するという2国家解決構想は、もはや時間切れだ」(ヤセル・アラファト<sup>3)</sup>)

第8章 「2国家共存」思想の起源、生成、発展の歴史 — パレスチナ側の選択  
総年表—各時代史の概説付き

1) 岩崎武雄『弁証法』、東京大学出版会、1954年、pp. 45-46.

2) GEORGE ANTONIUS, *THE ARAB AWAKENING*, LEBANON BOOKSHOP, BEIRUT, 1969, p.412.

3) GUARDIAN, 24Jan.2004, Seumas Milneとのインタビュー、この10ヶ月後の同年11月11日、75歳で死去した。

## 第8章 「2国家共存」思想の起源、生成、発展の歴史 — パレスチナ側の選択 歴史になったアラファト

聖地エルサレムから北方16キロ離れた西岸ラマラのパレスチナ自治政府本部。2007年11月に建立された故アラファト議長の霊廟に偉容さが漂う。この碑文には「ナクバ（アラビア語で災難、不幸の意味。1948年のイスラエル建国によりパレスチナの78%が喪失されてパレスチナ人の苦難の歴史が始まった破局）の灰燼（かいじん）から立ち上がり、パレスチナ人の国造りの方向を示した」（マフムード・ダルウィーシュ）と書かれている。このアラファトの霊廟は、周囲を青い水面に囲まれ、さながら水の上に浮かんでいるように建てられている。かの地に眠るアラファトは聖地エルサレムから離れたラマラの地ではなく、やがていつの日か東エルサレムを首都と定めたパレスチナ人の国家が建設され、聖地エルサレムの地に移されて埋葬される刻（とき）を静かに心待ちしているかのようだ。しかし、アラファトが2004年11月に急逝したあと、彼が40年間率いたパレスチナの国造り運動は路線をめぐる内紛を経て国造りの方向性が不透明になっているのが現状だ。

30年前の1980年、筆者は29歳の時、通信社の中東特派員としてレバノン内戦下のベイルートに赴任し、以後4年間PLOの取材に明け暮れた。支局兼アパートの隣りに『イスラエルの中のアラブ人』の著者サブリー・ジュリスのパレスチナ研究所やファタハ事務所が存在し、街中をパレスチナの少年兵たちが闊歩するなど、まさに「パレスチナ・ゲリラの時代」そのものだった。82年の第1次レバノン戦争でイスラエル軍に敗北したPLOがレバノンから撤退、翌83年、このパレスチナ研究所が爆破された。私の8階建てアパートも直撃を受けて多数の犠牲者が出たが、多くの友人、知人を失う中、筆者は家族とともにたまたまダマスカスに滞在中だったため、危機一髪で危うく難を逃れた。テロ事件や戦争のために、罪のない市民が家を焼かれ、難民と化し、何も知らない幼い子供、老人、力のない女性が無惨に殺され、死んで行く中東紛争の厳しい

現実に向き合ったこの時の過酷な戦時体験は、その後の私の「中東紛争研究」の原点となった。

このベイルート時代に多くのPLO幹部と出会ったが、アラファト議長に次ぐNO.2のアブ・ジハド軍事局長（1935年～88年）、NO.3のアブ・イヤド治安局長（1933年～91年）、NO.4のファルーク・カドウミ政治局長（1931年～）、PLOのレバノン首席代表シャフィーク・アルフート帰還局長（1932年～2009年）らの事務所に通い、彼らは私にとってパレスチナ問題の生きた教科書だった。

パレスチナ・ナショナリズム運動の系譜を見ると、1920年代～30年代に「アラブの蜂起」と言われた反英・反ユダヤ運動を率いたアミン・フセイニ（1893年～1974年）やカデル・フセイニ（1902年～1948年）、イッザディン・カッサーム（1882年～1935年）らが闘争第1期局面を担った革命第1世代とすると、アラファト議長をはじめ私が出会ったのは、「革命第2世代」の主役たちだ。1967年の第3次中東戦争で全土が占領されたパレスチナ解放闘争第2期の主役として、単なる難民問題に貶められた「パレスチナ問題」を民族の権利を回復するという〈パレスチナの大義〉にまで高めた彼らの功績は特筆に値するだろう。アラファト議長の同僚、アブ・ジハドとアブ・イヤドはイスラエルなどに暗殺されて志半ばですでに非業の死を遂げており、2004年のアラファト議長の死とともに、パレスチナ人の国造り運動は、闘争第2局面から、次の闘争第3局面を担う世代へ主役がバトンタッチする「アラファト後」の移行期へ移った。

### パレスチナ側の「レッドライン」

エルサレムを目指したアラファト議長が16キロ手前のラマラで斃れたことに象徴されるように、「アラファト後」を担う第3世代にとっては、ファタハの最有力指導者マルワン・バルグーチであれ、ハマスであれ、アラファト議長が最後まで譲らなかった〈レッドライン〉を踏み越えることはタブーになるのは間違いない。94年7月、筆者は通信社を辞めてカイロで3年間アラビア語研修を修了し、ガザ市

に3ヶ月間滞在中、帰還したアラファト議長とベイルート時代以来十数年ぶりに再会、ガザ・アズハル大学での講演に耳を傾けた。

このとき、彼が残した〈アラファト語録〉は、彼自身さえも決して踏み込めない「パレスチナ難民6百万人から委託された権限 (terms of reference) として次の世代に受け継がれていくに違いない。

「イスラエルが1967年戦争以前のラインへ撤退し、このあと解放されたパレスチナの22% (西岸・ガザ地区) に東エルサレムを首都とする主権国家を樹立し、占領終結・独立を達成する。このためには、ユダヤ人の入植地を解体する。難民問題は公正な解決を約束した国連安保理決議242および国連総会決議194に沿って解決する。私たちはこれからエリコ、ヘブロン、ナブルス、ベツレヘム、ラマラを経て、エルサレムで再会しよう」。

パレスチナに「アル・イブラ・フィ・アル・ハワーティム」(人の価値は最後に定まる) という諺があるが、アラファト議長が残した〈負の遺産〉(非民主的なワンマン体制) を克服して、アラファト後のパレスチナの将来を担う革命第3世代は、パレスチナ住民の民意を反映させた民主的な自由選挙を経て登場する正統性を備えた新指導部として、この〈パレスチナのタブー〉への挑戦にはあくまでも抵抗してくと考えられる。

#### 「共存思想」の生みの親 - イサム・サルタウィ

アラファトが「2国家共存」構想を推進した立役者だとすれば、この「共存思想」そのものを生み出したのは、パレスチナ人の思想家イサム・サルタウィ(1934年-1983年)だ。「わが兄弟サルタウィはイスラエルとの対話を推進したとの理由で過激派の凶弾に倒された。彼は真に勇気ある平和の英雄だった」(1994年7月、ユネスコ平和賞授賞式での演説)。

サルタウィは1934年1月、英委任統治下のヨルダン川西岸にあるサルタという小さな村で生まれた。名前にはサルタの出身という意

味が込められており、彼は終生、自分の生まれたパレスチナの土地に自己のアイデンティティを見いだそうとしていたようだ。父親アリはジェニンにある高校の校長だった。地元では詩人として知られ、アッカの名家の娘と結婚、イサムをはじめ11人の子供をもうけた。48年の第1次中東戦争後、一家はヨルダン統治下に入った西岸を転々としたあと、ヨルダンを経てイラクへ移住する。父親はバグダッドでイラク政府職員として財務局で働く一方、サルタウィはバグダッド大学で医学を専攻、米国へ留学して医学博士号を取得し心臓病の専門医になった。67年の戦争で自分の故郷がイスラエルの占領下に入ると、活動の舞台を中東に移し、68年3月、イスラエル軍を初めて敗北に追い込んだカラメの戦いに参加した。また、69年2月には親イラクの「パレスチナ解放行動機構」(AOLP) という小さなゲリラ組織を創設、欧州各地で数々のテロ活動を展開した。この当時のサルタウィは「政治解決の道を信じない過激派の闘士だった」(PLO最高幹部アブ・イヤドの述懐) という。70年2月、ミュンヘン空港でイスラエル航空エルアル旅客機を狙ったダヤン国防相暗殺計画(未遂)を決行、「パレスチナの爆弾がユダヤ、パレスチナ双方の対話を開始するカードになることを希望する」との声明を発表した。

AOLPは弱小グループだったため、影響力が弱く、1970-71年のヨルダン内戦のあと、PLO最大組織ファタハに統合された。サルタウィは最初、過激なテロリストとして活動していたが、イラクに住んでいた時、バグダッドに居住するユダヤ人社会に関心を寄せ、彼らにもパレスチナに住む権利があるとの考えに変わり、イスラエルとの平和共存への道を希求するようになった。1970年代に入ると、PLO内部ではパレスチナに住むアラブ人とユダヤ人が共存するひとつの国家の中に平和共存する構想が浮上、将来のパレスチナ国家にユダヤ人とアラブ人が一緒に住めるかどうかを探るため、まずアラブの国々の中で、2つの民族の共存の可能性を探る動きが出てきた。このPLOの新しい任務はサルタウィとファタハ幹部マフムード・アッパス (アブ・

マッゼン、現自治政府議長)が担当し、アラブ諸国に対し、ユダヤ人に対する態度を改め、イスラエルに住むユダヤ人をアラブへ帰還させるよう説得するとともに、反ユダヤ的な法律を破棄し、ユダヤ人に平等な権利を与えるよう訴えた。

しかし、PLOにとって、イスラエルの存在そのものは既定の事実としてもはや動かし難い現実になっていた。サルタウィは、この現実を冷静に分析した結果、パレスチナ問題を解決する唯一可能な道はイスラエルの存在を承認し、そのうえでイスラエル国家の隣りにパレスチナ国家を造る以外にあり得ないのではないのか、との結論に達した。そして70年代半ばにロンドン、パリ、ウィーンなど欧州各地でイスラエル人たちとの接触を開始し、イスラエルとPLOとの「対話の歴史」が始まった。

「私は、1994年7月にラビン首相とペレス外相がアラファトとともにユネスコ平和賞を共同受賞した光景を見て、個人的に大変感激しました。ラビンらもついに、サルタウィが敷いた平和共存をめざす路線が正しかったことを認めたのだと思います」(94年8月、エルサレムでの筆者とのインタビュー)。

ダヤン国防相(故人)とともに67年の第3次中東戦争の英雄といわれたマティヤフ・ペレド退役准将は、感慨深そうに自ら歩んできたハト派シオニストの軌跡を振り返る

1923年に英委任統治下のハイファに生まれたペレドは、15歳のとき、イスラエル国防軍の前身であるハガナに入り、48年の独立戦争ではネゲブの戦いで負傷し、ほとんど視力を失った。56年の第2次中東戦争ではガザ地区の軍政長官、67年戦争では参謀本部の准将としてイスラエル軍の歴史的な大勝利に大きく貢献した。しかし、ペレドにとってこの勝利は、彼の人生を急転換させる契機となった。

「私は67年戦争の結果、生まれ変わりました。それまでは西岸とガザはそれぞれヨルダン、エジプトに支配され、アラブの問題でしたが、われわれはこの地域の支配者、征服者となり、大きな問題を抱え込むことになりました。今やわれわれの方から、パレスチナ問

題の解決のためにイニシアチブを発揮しなければならない。この地域の自由と自決を求める人々の権利にこたえなければならない、という考えに変わりました」。

当時、参謀総長だったラビンに対し、「67年戦争の結果を平和のために利用すべき機会が訪れた。今こそパレスチナ問題を解決するため、西岸・ガザをパレスチナ人の土地と認め、ここに自分たちの国を造りなさいと言うべきだ」と提言した。だが、聞き入れられずに2年後に46歳で軍を離れた。退役後、カリフォルニア大学でアラビア語を習得してアラブ文学を研究し、テルアビブ大学文学部で教鞭をとる傍ら、75年12月にユーリ・アブネリ(作家)、アリエ・エリアフ(元労働党事務局長)、エホシャハト・ハルカビ(元軍情報長官)、ヨシ・アミタイ(キブツ活動家)らとともにハト派シオニストを結集した「イスラエル・パレスチナ平和のためのイスラエル評議会」を結成、パレスチナ人との対話の可能性を探り始めた。

過激なテロリストからイスラエルとの平和追求者へ変身したサルタウィ、アラブとの戦いの中で軍人からハト派のシオニストへと生まれ変わったペレド、この2人の出会いが1976年7月、パリで初めて実現した。パリに住むエジプトのユダヤ人アンドレ・コリエールからイスラエル評議会のところへPLOが接触したがっているとの情報がもたらされた。評議会は、PLOが74年以来、政治・外交を通してイスラエルとの間で平和解決を図ろうとする傾向を強めていることに気づき、彼らが生命の危険を冒して真剣に接触を望んでいるのだから、まず評議会を代表してペレドがPLOの欧州代表を務めるサルタウィと秘密裏に会談することになった。

この歴史的とも言える秘密会談は76年7月21日、パリ市内にある民家のアパートを借りて行われ、サルタウィとペレドは夕食を挟んで8時間話し合った。ペレドは語る。

「サルタウィに出会うまではテロリストの先入観が強かったが、実際に会ってみると、とても知的かつ誠実な人柄であることが分かり、すぐに意気投合しました。主にユダヤ人

とパレスチナ人との歴史、シオニズム、パレスチナ国家の将来などについて議論し、われわれは双方受け入れ可能な解決策に到達することができるとの確信を深めました」。

双方が対話の基礎にした共通理解はつぎのような内容だった。

I 中東和平の条件-パレスチナ紛争は、自分たちの領土をめぐるパレスチナ人とユダヤ人が同じ土地を奪い合う対決にほかならず、ユダヤ人と同様にパレスチナ人にも同じ権利がある。したがって、ユダヤ人がパレスチナ民族の権利を認めるまで中東に平和は来ない。またパレスチナ人がユダヤ民族の権利を認めるまで中東和平は実現しない。

II イスラエル・パレスチナの2国家共存-パレスチナ人が自分たちの土地に自らの国を持つのは当然であり、彼らの権利である。イスラエルが西岸・ガザ地区をいつまでも占領し続けるのは違法であり、イスラエル国家に多大な被害をもたらす。したがって、イスラエルは67戦争以前の状態にまで現状回復を図るべきである。2国家共存こそが相応に真の平和をもたらす唯一の解決策である。政治・外交交渉を通じてこの目標を達成する。

III パレスチナ国家の規定-パレスチナ国家は西岸・ガザを版図として、東エルサレムを首都と定める。67年戦争以前の境界線でイスラエルとパレスチナが平和共存するが、非武装化などパレスチナ国家の主権に関わる問題は調整可能である。

IV エルサレム問題-イスラエル、パレスチナ両国がエルサレムの首都を分かち合うことで解決可能である。

V 難民問題-難民の帰還権を認めた国連決議に基づいて解決を図る。

最初の接触を機に、サルタウィとペレドは対話の舞台を欧州から米国へ広げ、イスラエルとPLOの月1回の定期協議へと発展させた。PLOからはサルタウィを代表にサイド・ハマミ駐英代表、イブラヒム・スース駐仏代表、サブリー・ジュリスパレスチナ研究センター所長らが参加、のちにアブ・ジハド、アブ・マッゼン（マフムード・アバス）、アラファトら最高指導部まで加わるようになった。PLO側は、ペレドらイスラエルらハト派を通して政府レベルでの公式接触を求めたが、イスラエル政府は対話を拒否したため、市民レベルの対話推進に力が注がれた。76年10月に行われた2回目の対話から加わったイスラエル人作家ユーリ・アブネリはこのときの様子をこう記している。

「ベイルートとテルアビブからやって来たパレスチナ人3人とイスラエル人4人の敵同士が、小さなテーブル越しに向かい合った。テーブルにはコーヒーとケーキが用意されていた。サルタウィは右手にマスバハ（礼拝用の数珠）握っていた。灰色の髪をした若々しい顔の男だった。威風堂々とし、英語が上手で、身なりも立派だった。だが、この時はかなり動揺している様子だった。同僚のサブリー・ジュリスとともにベイルートから来たのだが、レバノン内戦が激化したためベイルート空港を使えず、船でベイルートからキプロスへ向かい、そこから飛行機でパリへ入る予定だった。ところが、この計画が直前になって変更され、ベイルートからダマスカスへ出てそこからパリに入ったのだった。到着後、ベイルート港から乗る予定だった船が公海上でイスラエル海軍に拿捕され、ジュニエ港でレバノン右派民兵に引き渡され、乗っていたパレスチナ人は皆虐殺されてしまったことを知らされたという」<sup>4)</sup>

イスラエルとの対話を追求するサルタウィの活躍は目覚ましく、76年11月、ワシントン、ニューヨークで在米ユダヤ人グループと相次いで接触、「パレスチナの現実、アラブ国家

<sup>4)</sup> Uri Avneri, *My friend and the Enemy*, London, Zed Books Ltd., 1986, pp.122-123.



とユダヤ国家が平和共存することを必要としており、パレスチナ人こそがあなた方に本当の平和をもたらすことができる」などと訴えた。77年1月、パリでペレドと再会したサルタウィはイスラエルとパレスチナの平和共存に原則合意、「イスラエル側が西岸・ガザに対するパレスチナの自決権を認めるならば、中東紛争は直ちに終結するだろう」と言明した。79年10月、ウィーンでクライスキー財団から、イスラエル・PLO間の対話推進の理由により人権・平和賞を受賞した。

サルタウィにとって、83年1月、イスラエルのシオニストグループとアラファトとの会談を実現させたことが最大の歴史的成果となった。シオニストとの対話路線がついにアラファトによって正式に承認されたからだ。1月12日、パリにあるサルタウィの事務所、チュニスのアラファト事務所から深夜の電話が入った。アラファトがシオニスト平和代表団との会談に応じることを伝える緊急連絡だった。ペレドらシオニスト代表団はテルアビブからパリ経由でチュニス入りし、18日夜、チュニスのPLO大使邸で会談が始まった。サルタウィのほか、マフムード・アッバスも同席した。アラファトはこれまで、イスラエル国内の人々から直接情報を得る機会がなかったため、イスラエルの政治情勢に特別の関心を寄せた。

**ペレド** 「イスラエル国内の情勢は流動的です。PLOの政策が変化し、もはやイスラエル国家の破壊を目指しておらず、本当に平和を望んでいることを世論に訴える必要があります。パレスチナ国家の樹立こそが紛争の終結をもたらすことを説得しなければなりません」

**アラファト** 「全くその通りだ」

会談後、永続する公正なパレスチナ和平実現へ向けた共同コミュニケが発表され、サルタウィの推進してきたイスラエルとの対話・共存路線がようやくお墨付き得た輝かしい日となった。

ところが、この対話・共存路線はその後、大きな行き詰まりを迎える。イスラエル国内ではペレドら平和代表団の対PLO接触問題が

クネセト（国会）で取り上げられ、右翼連合リクードが「国家反逆罪で裁判に」などと非難した。イスラエル政府は「PLOはイスラエル国家の破壊をめざす暗殺集団であり、いかなる形であれ、テロ集団とは交渉しない」（国会決議）という立場だが、イスラエル国家の安全を脅かさない限り、市民レベルの接触は違法とは見なされなかった。しかし、イスラエルは1986年、PLOとの接触を禁じる法律を制定、これに違反すると、少なくとも3年以下の禁固刑を科されることになった（92年になって廃棄）。

他方、PLOにとっても、シオニストとの接触は重大な問題を提起した。PLOは喪失したパレスチナ領土の回復をめざす組織であり、もしシオニストとの接触を認めれば、イスラエル国家を受け入れてイスラエル領になっているパレスチナの一部を放棄したことを意味し、パレスチナの全土解放をめざす立場からすると、「裏切り者」と映る。PLOの憲法であるパレスチナ民族憲章では、「パレスチナ全面解放」（第21条）、「シオニズムはパレスチナ解放にとって敵対的政治運動であり、イスラエルはその道具」（第22条）と規定し、シオニストとの接触を封じ込めているからだ。

1983年2月、第16回パレスチナ民族評議会（PNC）がアルジェリアの首都アルジェで開かれた。第1次レバノン戦争でイスラエル軍に敗北したPLOがどのような戦略を打ち出すかを探るため、筆者もベイルートから現地入りした。会場は戦争の敗北を総括するという雰囲気はなく、イスラエル、米国非難の声相次ぎ、シオニストとの対話を追求するサルタウィらの和平派は発言の場を奪われてしまった。会議前にシオニスト側と接触していたアラファトも、過激派から突き上げられて窮地に立たされた。アラファトはPLOの分裂を恐れ、ファタハからはサルタウィの代わりにナンバーツーのアブ・イヤドに代表演説を許して急場を凌いだが、シオニストとの対話の成果を発表しようとしていたサルタウィの怒りが爆発、会場のフロアでアラファトを怒鳴りだし、彼はその場でPNCメンバーの辞表をたたきつけた。記者会見したサルタウィ

は「今回のPNCでは、レバノン戦争は中東最強のイスラエル軍と3ヶ月間も戦い抜いたので、パレスチナ人にとって栄光ある勝利だったと評価されているようだが、とんでもない間違いだ。現実はいわれわれにとって敗北であり、惨憺たる戦略の失敗であり、深刻な悲劇だった。もしもこの戦争を勝利というならば、PLOが必要としているものは、この種の勝利の積み重ねなのだろうか。そんな事であれば、われわれパレスチナ人たちは、やがて、中東とは何ら関係ない場所でパレスチナ問題を話し合うような立場へと追い込まれてしまうのではないかと、パレスチナ解放運動の将来に警鐘を鳴らした。

PNCの後、サルタウィの所属するファタハ革命委員会は、組織の承認がない限り、シオニストとの接触を禁じる秘密決定を下し、サルタウィの対話・共存路線は死を宣告された。これまで7年間続けられてきたイスラエル・PLO間の対話は最終的に打ち切られるのか。1週間後にロンドンでユダヤ人グループ主催の国際会議が予定されており、サルタウィがペレドらシオニストとともに同席すれば、ファタハからの除名はもちろん、過激派から裏切り者として断罪されかねない厳しい状況に追い込まれた。彼はいったんは主催者側に病気のため欠席と通告したが、思案の末に参加を決断した。このとき、サルタウィから相談を受けたシオニストのユーリ・アブネリは回想する。

「私は、ファタハの秘密決議に違反してもロンドン会議に出ると決断したときのサルタウィの顔をいまだに覚えています。彼の顔には平和の戦士としての誇りが浮かんでいました。暗殺の脅迫に屈して用心深く進み、挑戦を避けるのは、彼のスタイルではない。彼はいつでも闘いに備えた戦士でした。あとで考えてみると、このときこそ彼の運命を決定付けた瞬間だったような気がします」。

並々ならぬ決意で臨んだサルタウィは、会場を埋めたアラブ人、ユダヤ人、パレスチナ人を前にほとばしる感情を抑えた声で、イスラエルとの対話・共存に懸ける信念を切々と訴えた。

「弱虫が平和を作ると考えたら、それは間違いだ。平和を作り出す者はいつもタフであり、われわれはこれからそのことを皆に示してやりたい」。

だが、この必死の叫びは、会場から「この裏切り者め、おまえの最後はサダトと同じ運命だ。お前みたいなパレスチナ人がいるからベイルートは侵略されたのだ」と叫ぶ野次にかき消された。

「君たちは何をいっているのか。静かにしなさい。私は君たちにどんなに野次られても、決して怯むことはない。野次を飛ばすあなた方の正体はアブ・ニダルグループだろう。私は脅しに屈し、平和を追求する愛国の道を途中で放棄したりしない。平和のために闘い続ける覚悟だ」。

83年4月、ポルトガルで開かれた社会主義インターの第16回大会に出席するため、サルタウィは単身でリスボンに乗り込んだ。国際認知を求めるパレスチナ運動にとって社会主義インターは重要な外交舞台であり、PLOの公式代表権を獲得するのがサルタウィの目的だった。イスラエルからは労働党のシモン・ペレス党首（当時）が参加し、PLOに代表権を付与しないよう、舞台裏でサルタウィへの妨害工作を展開した。サルタウィは会議の正式代表団には加われず、個人的なオブザーバー資格での参加を許された。ポルトガル警察からの要人警護は付かず、普段から護身用の銃を持たないサルタウィは、テロの格好の標的となった。4月10日、日曜の朝、海岸リゾートのアルブフェイラにある会場ホテルの一階ロビーにいたところ、明るい色のスーツを着てメガネをかけたパレスチナ人の若者が近づき、背後から6発の弾丸を発射、すぐにドアから逃走した。サルタウィは即死状態だった。アブ・ニダルグループが「パレスチナ人の裏切り者に対する死刑宣告を実行した」と、犯行声明を発表した。アブ・ニダル派はイスラエル承認を求めるPLOハト派の言動に対し、これまでにサイド・ハマミ駐英代表（78年1月）、エッセデン・カラク駐仏代表（78年）、ナウム・カデル駐ブルッセル代表（81年）ら7人以上を血祭りに上げていたが、ついにサ

ルタウィも彼らのテロに斃された。

サルタウィ暗殺の悲報が世界を走り抜けた。エルサレムに住むマティヤフ・ペレドのもとにも新聞社から至急報が伝えられ、ペレドはすぐパリに住むサルタウィのワダド夫人へ国際電話を入れた。電話口に出た夫人は声を発することができず、無言のままだったという。社会主義インターの会場では、生前は決して発言の機会を与えられなかったサルタウィの演説遺稿がブラント元西ドイツ首相によって読み上げられた。会場は重い沈黙に支配され、サルタウィの平和への熱い思いが出席者の胸を打った。サルタウィを無視し続けたペレス党首も「偉大な平和の英雄だった」とついに認めざるをえなかった。

サルタウィの遺体は、親交のあったハッサン・モロッコ国王が提供したチャーター機でアンマンに移送され、数千人のパレスチナ人が彼の棺を静かに見送った。松林が生茂ったアンマン郊外にある「殉教者たちの墓地」に、約1000人の参列者に見守られながら、同じ運命をたどった同僚のサイド・ハマミが眠る墓の隣りに埋葬された。生前のサルタウィは生まれ故郷のサルタへの埋葬を望んでいたが、ワダド未亡人の申し入れに対し、イスラエル政府からの返事はなかった。暗殺のニュースが西岸に伝えられると、サルタ村は深い悲しみに包まれた。何度も対話を重ねたイスラエル人のアリエ・エリアフは「彼は生前、人生はいつでも消されてしまうロウソクの灯のようなものだ、と言っていた。平和と和解、そして穏健な彼の共存思想は一人の人間の生命よりも強いものであり、彼が掲げた平和共存の松明を後に続く人たちが引き継いでさらに前進すると、確信しています」、と、志半ばで斃れた共存思想家の死を悼んだ。

サルタウィは「パレスチナ国家」への道程について次の言葉を遺している。

「私は、パレスチナ人が自分たちの国家を持てるようになるまで、力の限り闘い続けるだろう。では、どうしたら、この民族の目標を達成できるのだろうか。これには3つのアプローチがある。

まずひとつは、現在の状況では何も達成で

きないので、急いで行動する必要はない、という立場だ。この考え方に立てば、イスラエルを承認しない限り、イスラエルは決して中東域内で正統たる存在には成り得ない。だから、状況が変わるまで、さらに百年間待とうではないか、というものだ。

次のふたつ目は、パレスチナ人はすべての政治活動を凍結し、代わりにアラブ世界の革命に邁進すべきだという立場だ。この考え方によれば、まずアラブ世界で革命が勃発する。革命政権があらゆる努力を結集させて、イスラエルを攻撃して壊滅するというものだ。いつこれが実現するのか、アラーの神のみ知り給う。

そして最後に3つ目は、直面する現実から逃避したりせず、現実をあるがままの姿で直視することが大切だ。パレスチナをめぐるパワーバランスの現状と政治行動の可能性を秘めた現下の情勢のもとでパレスチナ人のためになし得るあらゆる事を模索し、追求すべきだ」。

こうしたサルタウィが残した発言や、政治行動の軌跡を丹念に辿てみると、彼が生み出したパレスチナの共存思想は萌芽→生成→発展を経てパレスチナ民族解放運動を支える理念として地下水脈のように脈打っていることがうかがえる。

### 主権/独立/尊厳

さて、これまで見てきたように、1988年11月以降、「2国家共存」を受け入れてパレスチナ全体の22%に相当する西岸・ガザを版図に東エルサレムを首都とするパレスチナ国家の樹立を目指す新たな民族解放運動に乗り出したパレスチナ側だが、今回の第9章では、パレスチナ側が構想する「パレスチナ国家」とは何かを考察してみる。結論を言えば、この「西岸・ガザ国家は、(1) - 「独立」、(2) - 「主権」、(3) - 「パレスチナ人の誇り (尊厳)」 - という3条件を満たさない限り、実現することにはならないだろう。パレスチナ側が目指す「西岸・ガザ国家」について本章で指摘した、〈アラファト語録〉を改めて引用すると一、



「イスラエルが1967年戦争以前のラインへ撤退し、このあと解放されたパレスチナの22%（西岸・ガザ地区）に東エルサレムを首都とする主権国家を樹立し、占領終結・独立を達成する。このためには、ユダヤ人の入植地を解体する。難民問題は公正な解決を約束した国連安保理決議242号および国連総会決議194号に沿って解決する。私たちはこれからエリコ、ヘブロン、ナブルス、ベツレヘム、ラマラを経て、エルサレムで再会しよう」。

このパレスチナ国家構想は、アラファト自身さえも決して踏み込めない「パレスチナ人6百万人から委託された権限（terms of reference）として次の世代に受け継がれていくに違いない。

パレスチナに「アル・イブラ・フィ・アル・ハワーティム」（人の価値は最後に定まる）という諺があるが、アラファト議長が残した〈負の遺産〉（非民主的なワンマン体制）を克服して、アラファト後のパレスチナの将来を担う革命第3世代は、パレスチナ住民の民意を反映させた民主的な自由選挙を経て登場する正統性を備えた新指導部として、この〈パレスチナのタブー〉への挑戦にはあくまでも抵抗してくと考えられる。

（次回は、第9章―「2国家共存」とイスラエルの選択、第10章―「2国家共存」構想の研究、および本稿パレスチナ関連年表の第2部を掲載 参考文献は最終回に一括掲載予定）

**<総合年表 — 各時代史の概説付き>****◎パレスチナ関連年表 — 中東紛争の前身—パレスチナの変遷および国際関係史（前半）****1. <中東百年紛争 — 舞台>**

**パレスチナとは ～** 現在のパレスチナ（2万6千平方キロ）は、地中海の東岸からヨルダン川の西岸に至る細長い地帯。南北の長さ240キロ、東西の幅30～110キロ、面積は北海道の3分の1、四国の1.4倍にすぎない比較的狭い地域。歴史的には広義のパレスチナはシリア南部地方に属してヨルダン川東岸も含むが、第一次大戦後の1921年、ヨルダン川を境界に2分割され、東岸はパレスチナから分離され、今日のアラブ国家ヨルダン（9万7千平方キロ）となった。この地域はヨーロッパ・アジア・アフリカの3大陸を結ぶ十字路に位置し、イラクのメソポタミアからシリア地方にかけた「肥沃な三日月」地帯の心臓部にあたるため、古代から諸々の民が争奪を繰り返す舞台となって来た。カナーンやフェニキアとも呼ばれるが、この地中海の海岸地帯が紫の染料を採る貝殻の特産地だったため、先住民（フルリ人）から「帝王の用いる紫の衣服の染料を産する国」を意味するフルリ語に由来する。フェニキアもギリシャ語で紫を意味するフィニクスに由来。

**パレスチナの民 ～** 今日のアラブ人、ユダヤ人が属するセム（ノアの長兄）系族の移動を跡付けると、まずメソポタミアのアカド族がサルゴン1世時代（紀元前2854～同2530）にパレスチナまで勢力を拡大、次にアムル族（旧約聖書はアモリ人）の古バビロニア王国（紀元前2105～同1805）、そして第3番目にカナーン族が紀元前2000年前後に登場、パレスチナを含めて全オリエントを支配したアッシリア族の帝国（紀元前2134～同612年）とほぼ同時期に第4番目に移動して来たアラム族が紀元前12世紀以降、ダマスカスを中心に小王国を築いた。そしてこのアラム族のうち、メソポタミア地方からカナーンの地をめざして波状的に移動する遊牧民が、大河（ユーフラテス河）から渡って来たものを意味するイブリー（Eber Ha-Nahr）と呼ばれたヘブル族（ハビル/イビル）であり、イスラエル民族の太祖アブラハムがカナーンに初めて足を踏み入れたのは紀元前20～19世紀ごろだった。同12世紀頃、パレスチナの語源となる欧州系（クレタ?）の民ベリシテ人の国がガザを中心に栄えており、アブラハムの移住第一波に次いで前14世紀第二波、前13世紀末第三波と押し寄せ、先住民との抗争の末、ユダ族を中心に「イスラエル王国」（紀元前1020～同586年）を建国した。

**2. <中東百年紛争 — 前身> ①旧約聖書の時代 ～ イスラエル=ユダヤ民族が主人公**

<概説>パレスチナに建国して華々しく活躍し、文化、文明、思想、宗教など人類に多大な足跡を残したイスラエル=ヘブライ=ユダヤ民族。

イスラエル興隆と発展、興亡と衰退の歴史は伝承とともに旧約聖書に詳しく描かれており、パレスチナの国土に対するイスラエル側の「歴史的権利（主張）」を根拠付ける旧約時代の歴史的な背景は紀元前1400年ごろから紀元前2世紀に及んでいる。

**「パレスチナ関係史」**

紀元前2千年紀初め	世界最初の帝国となるセム系のアッシリア族がチグリス川中流域の北メソポタミアに興る（前15世紀までユーフラテス中流域のミタンニ帝国に服属、前9世紀から周辺を征服、前7世紀前半—656年に全オリエントを統一してアッシリア帝国（950～612）に
紀元前19世紀ごろ	イスラエル=ヘブライ民族の太祖アブラハム（アラム人の末裔）がメソポタミアからカナーンの地（パレスチナ）へ移住 守護神ヤハウエから「かの地をお前の子孫に永遠の所有として与える」と約束される（聖書記典J=ヤハウエスト資料—前950年頃）典形成）
1720年	セム系遊牧民ヒクソス（Hyksos/外国の首長たちの意）が北西アジア方面からエジプトのデルタ地帯に侵入・定住、中王国を滅ぼして新たに第15王朝樹立（1650—1542頃）
17世紀頃	アブラハムの孫ヤコブが神からイスラエル（神と闘う、神が強く現われるの意）という名前を与えられる。ヤコブ=イスラエル一族が飢饉のため（?）エジプトへ移住
1567年	テーベの豪族アハメス1世がヒクソス駆逐し新王国第18王朝樹立、新王国—帝国の時代（1567—1085、第18～20王朝）
1400年頃	「エルサレム」（ウルサレム）がエジプトのアマルナ文書に記載

1280年頃	モーセに率いられたイスラエル人がエジプトから脱出(1227年頃?) ― 「出エジプト記」
前13世紀末	ペリシテの民(民族系統不詳?)がエーゲ海方面(クレタ?)から地中海東岸に侵入、「ペリシテ国」建設(1150年～604)、鉄器を伝播
前12世紀頃	イスラエルの民がカナーン征服(1250～1200)
1114年	
1100年	エジプト新王国が国土分裂、末期王朝時代に
前11-6世紀	「イスラエル王国」(サウルー 1020～1000?、ダビデー 1000～961、ソロモンー 961～922)の時代 ダビデがエルサレムを首都に南北統一王国を樹立(1029年)、子ソロモン(965-928年)がエルサレム南郊のシオンの丘に第1神殿建設(960年ごろ) ソロモン死後、北の「イスラエル王国」(922-722)と南の「ユダ王国」に分裂(922年-587)
前10世紀頃	ダビデ・ソロモン王国時代の編史が成立(編史に神の名をヤハウェ Yahwehと呼んで記述する記者/著者ヤハウィストYahwist/Jahwistによる)J典形成-950年頃、850年頃に成立) 853年 アッシリア帝国のシャルマネセル3世(859-824)がカルカルの戦いで北の「イスラエル王国」王アハブ(869-850)らの「反アッシリア連合」撃破
前8世紀頃	旧約聖書の編集始まる、「創世記」、「出エジプト記」、「レビ記」、「民数記」、「申命記」(～紀元前5世紀頃までに成立)
750年頃	記者・著者ヤハウィストの資料を補足するエロヒスト資料(E記典、編史に神の名をエロヒム/Elohimと呼んで記述する記者/著者エロヒスト、Elohist)が成立
前7世紀	イラン北西部アゼルバイジャン出身のゾロアスター(660ごろ―583)が生まれ、ペルシャの民族宗教/zarathushitra=拝火教興す。 (アフラ/神=マズダ/知恵を最高神とする善悪2元論に基づく宗教、「最後の審判」などの終末観(Eschatology)がユダヤ教やキリスト教にも採り入れられる)
前7世紀初め	J記典とE記典が結集される
733年	ダマスコの「アラム王国」がアッシリア帝国のティグラトピレセル3世(745-727)により滅亡
722-721	北の「イスラエル王国」がアッシリア帝国のサルゴン2世(721-705)により滅亡、上層階級27970人を捕虜にして連行
701年	アッシリア帝国のセンナケリブ(705-681)が「ユダ王国」のエルサレム包囲
670年	アッシリア帝国のエサルハドン(680-689)がエジプト征服
656年	アッシリア帝国が全オリエントを統一する大帝國を建設
645年	エジプトがアッシリアから独立
622年	イスラエルの歴史書=「申命記」の記典(D=Deuteronomy,「モーセ5書」、「モーセ法典」に相当)の写本(文獻)が神殿内で発見される
621年頃	バビロニアにセム系のナボポラッサル(626-605)が新バビロニア王国(カルデア王国)興す、
612年	アッシリア帝国が新バビロニア(カルデア帝国)とメディアにより滅亡、オリエント世界は「4国分立時代」に ～バビロンの新バビロニア王国(セム系)、ナイルのエジプト王国(ハム系)、イラン高原の遊牧民族メディア王国(印欧系ーイラン最初の国家)、小アジア南西のリュディア王国(印欧系)～
604年	「ペリシテ国」が新バビロニアのネブカドネザル(605-562)により滅亡
597年	ネブカドネザル2世がエルサレム攻略、「ユダ王国」のエホヤキン王(598―ら上層階級を3月16日バビロンに連行、「バビロン捕囚」(第1回))
587年	ネブカドネザル2世が再びエルサレム攻略、陥落。「ユダ王国」のゼデキヤ王(597-587)ら上層階級を連行、「バビロン捕囚」(第2回)
586年	「ユダ王国」が滅亡、400年間続いたダビデ王朝廃絶、第1神殿破壊。582年「バビロン捕囚」(第3回)「バビロン捕囚」から60年後に帰還、ユダヤ人の民族宗教が成立。破壊されたソロモンの第1神殿が「第2神殿」として再建
568年	ネブカドネザル2世がエジプト侵略
538年	古代ペルシャ帝国/アケメネス朝ペルシャ(539-330)のキュロス2世(クロス/559-529)大王がバビロンを占領・陥落、新バビロニア滅亡。ユダ捕虜を解放、4万人帰還

---

549年－39頃	最も若い資料の祭司典（P、祭司的特色を有するPRIEST CODE）形成（450年頃に成立）
525年	ペルシャ帝国=キュロスの子カンビセス（529-521）がエジプト征服、ダリウス1世（522-486）時代にシリア、メソポタミア、小アジアに跨る大版図を支配、全オリエント統一
334年	マケドニアのアレクサンドロス大王（336-323）がペルシャ征服、アケメネス朝ペルシャ滅亡（330年）、331年パレスチナ支配、332年エジプト征服 大王の死後、パレスチナはプトレマイオス王朝（エジプト）の支配（323～200）とセレウコス王朝（シリア王国、312-63）の支配（200）下に。5書の一つ「伝道の書」成立
167年-162年	＜マカベア戦争＞、セレウコス朝の信仰弾圧・ヘレニズム同化策にユダヤ・ハスモン家のユダ・マッカバイオス（マケヴェト=鉄槌）が反乱、次男シモンがエルサレム入城（142年）、ハスモン王朝樹立、独立（143-前63）
紀元前63年	ローマ帝国の統領ポンペイウスがエルサレムに入城、パレスチナを支配・統治、ハスモン王朝ローマ総督下に。ローマ帝国（オクタ비아ヌス/アウグストゥス帝政の時代63-14）へ
47年	カエサル統領（102-44）がエドム出身のアンティパテル（イドミヤ人）をユダヤ領主に任命（カエサル終身独裁管轄殺－44年3月15日）
37年	＜ヘロデがユダヤ大王に＞アンティパテル（エドム出身/イドミヤ人・ユダヤ教徒に改宗）の次男ヘロデ潜王（37-4年）が即位（ティベリウス帝政時代14-37）、第2神殿再建、西壁の一部が「嘆きの壁」に
30年	クレオパトラ女王（48-30）が自殺、プトレマイオス王朝（304-30）滅亡
6－4年頃	ガリラヤ出身のヨシュア（のちのイエス・キリスト）が生まれる、ヘロデ死去（前4年）
西暦6年	ローマ帝国がパレスチナ併合、ローマ帝国のシリア属州ユダヤ行政区に
33年	正午～午後3時（金曜日）、イエス・キリストがローマ帝国のユダヤ行政区長官ポンティウス・ピラト総督、ハスモン朝のヘロデ・アンテパス太守（エスナルク/紀元前4－西暦40）治下エルサレムで十字架刑の磔に、復活とメシア信仰のキリスト教起源
66－70年	＜第1次ユダヤ戦争＞、ユダヤがローマ帝国に「反乱」、エルサレムでローマ軍を撃破、64年皇帝ネロがガリラヤから反乱鎮圧
70年	エルサレム陥落（9月）、エルサレムの第2神殿を徹底破壊、西の城壁の一部が残る。ユダヤ民族の悲劇「マサダの自決－960人」（73年5月3日）、パレスチナはローマの直轄地に（～395年）。ユダヤ人ヨセフス指揮官（37－100?）がローマ軍に投降、自らの体験を基に「ユダヤ戦記」を執筆、歴史記述家に。
90年頃	旧約聖書の正典確立（ヤブネ会議）、バビロン捕囚時代から始まっていたイスラエル宗教の經典編纂が紀元前1世紀から西暦1世紀の間に律法・預言者・諸書の3部門から成る「旧約聖書」として仕上がる ～ユダヤ人は戦争で殺害され、奴隷市場で売られ追放・迫害され、「離散=流浪（ディアスポラ）の民」に～
132－135	＜第2次ユダヤ戦争＞、ユダヤのシメオン・バル・コホバ（星の子の尊称）がローマ帝国に反乱、ハドリアヌス帝（117－138年）が鎮圧、反乱者はガザなどの奴隷市場で売られ、エジプトへ連行、地名を「パレスチナ」（ペリシテの地）に変更、エルサレムも「コロニア・アエリア・カピトリナ」に、ユダヤ人はエルサレム立ち入り禁止、異教の住民が入植、定住。後の聖墳墓教会の地にはヴィーナスの神殿を建設。
313年	コンスタンティヌス皇帝（306－337）がキリスト教公認（ミラノ勅令）、325年キリスト教教義統一（三位一体説－ニカイア会議）、国教化（392年）
337年	ローマ帝国がペルシャ帝国ササン朝ペルシャと開戦 363年30年講和
395年	ローマ帝国が分裂し東ローマ帝国（～1453）と西ローマ帝国（～476）に、パレスチナは東（ビザンツ帝国）の支配下に（～638年）ユダヤ人は北部ガリラヤ周辺を除いてパレスチナの国土から引き離されて、「十字軍の時代」までにはほとんど姿を消す ～旧約聖書=「イスラエルの時代」が終焉～

---

---

### 【ディアスポラの時代へ】～「ユダヤ人問題」が発生

〈概説〉こうしてローマ帝国に「イスラエル」の国を滅ぼされたあと、世界各地に離散したディアスポラのユダヤ人は宗教民族として生き延び、ヨーロッパへ移住したユダヤ人はローマ帝国のキリスト国教化（392年）以後、差別・襲撃・迫害・追放・虐殺などの「受難の時代」に。中世のローマ・カトリックが支配した「教会の時代」、異教徒と闘う「十字軍の時代」（1096－1291）にユダヤ教の選民思想が重なり、ユダヤ人排斥運動（反セム主義）が台頭、19世紀の欧州ナショナリズムの時代を迎えて、ユダヤ人は欧州では国民国家の一員として同化するのが困難となり、19世紀末、自らが安心して定住できる民族郷土をパレスチナ（シオン）に見いだすユダヤ民族主義＝シオニズム運動が始まった。

### 3. <中東百年紛争 ― 前史> ②イスラムの時代 ～ アラブ人&イスラム教徒が主人公

〈概説〉パレスチナには7世紀以降、アラビア半島からイスラム教を武器にしたアラブ人が北上して登場、イスラム化、アラビア語化が徐々に進行、以後、アラブ住民はイスラム教徒として定住、「イスラムの時代」を迎える。パレスチナはヨルダン川を挟んで東岸はウルダン（ヨルダン）、西岸はフィラステイン（パレスタイン）の二つの管理区に分割。アラブ人の移住が進み、アラビア語がこの地域の言語に、住民の大半がイスラム教徒に改宗。ユダヤ人もイスラムに改宗する者が多く、「十字軍の時代」まで比較的平和に推移、パレスチナのユダヤ人3万～4万人に。

#### 「パレスチナ関係史」

502-06年	ペルシャ帝国ササン朝ペルシャ（224－651/国教ゾロアスター教）と東ローマ帝国（ビザンチン帝国/国教キリスト教）が交戦、ペルシャ戦争再燃。 532年和平条約 562年 50年の和平条約
6世紀前半	クライシュ族ハーシム家が遠距離貿易の安全確保
610年	イスラム教の開祖ムハンマド（571頃－632）が天啓を受ける、イスラム教が成立/発展へ
614年	ペルシャ帝国ササン朝ペルシャがエルサレム占領、エジプト征服（619年）
622年	ムハンマドがメッカからメディナに聖遷（ヒジュラ）、イスラム暦ヒジュラ元年（7月16日）、イスラムの時代へ
632年	6月8日ムハンマド死去、アブー・バクル（632－634）が初代カリフに
634年	アブー・バクルが死去、ウマルが第2代カリフに（634－644）、
636年	イスラム教徒のアラブ人（イスラム・アラブ軍）が侵入、東ローマ帝国と戦ってエルサレム占領（636年）、シリア制圧、ササン朝軍破る（9月）ウマルがモスクを建設、エジプトにミスル＝軍事都市建設（638年）アラブ人統治の時代に（632－1072）
642年	ニハーヴァンドの戦いでペルシャ帝国ササン朝ペルシャ（224－651）軍破る（651年滅亡）、イラン全土を制圧
644年	ウマルがキリスト教徒のペルシャ人奴隷に暗殺され、メッカの名門ウマイヤ家ウスマーンが第3代カリフ（644－656）に、コーラン集録・編集
656年	ウスマーンがエジプトの反乱・叛徒にメディナで暗殺され、ムハンマドの従兄弟アリー擁立、第4代カリフに（656－661）、ウマイヤ家と対立、第1次内乱
661年	アリーがクーファのモスクで不満を抱くハワーリジュ（離脱）派の刺客に暗殺される ～ 正統カリフ時代（632－661）～
661年	ウマイヤ家ムアウィヤ（シリア州総督/第3代カリフ・ウスマーンの従兄弟）がカリフに（661－680）、10月ウマイヤ朝樹立（661－750）、カリフ位世襲制に アラブ帝国の時代へ
680年	アリの子ホセインがクーファ近郊カルバラーで蜂起、ウマイヤ軍に敗北、暗殺される。カルバラーの大虐殺、シーア派成立へ、第2次内乱

---



688年	エルサレムの「神殿の丘」(古代イスラエル王国ソロモン王の神殿跡)にウマイヤ朝中興の祖アブド・アル・マリク (685-705) がムハンマドが昇天したといわれのある岩にドーム状の記念堂=「岩の黄金ドーム」を建設 (-691)、イスラム教第3の聖地に、アラブ帝国初の金貨ディナール (東ローマ帝国通貨デナリウスに替えて) 発行
705年	アブド・アル・マリクとワリード一世が洗礼者ヨハネ教会=聖ヨハネ会堂 (ダマスカス) をウマイヤッド・モスクに改修 (715完成)、アルアクサモスク建設 (705-715)
749年	アブ・アル・アッバース・アル・サッファーフ (750-754) がクーファ占領、カリフに推戴
750年	アッバース家革命軍がウマイヤ朝軍を破る、ダマスカス陥落、ウマイヤ朝滅亡、アッバース朝成立 (-1258年)、762年アル・マンスール (754-775) が新都バグダッド建設 (766年完成)、
786年	ハルン・アル・ラシド (-806年) が第5代カリフに即位、アッバース朝黄金時代に
1038年	イスラム教徒のトルコ系セルジューク朝 (-1194年) 興る
1055年	トウグリル・ベク (-1063年) がバグダッド入場、スルタン (君主) の称号授与される
1072年	パレスチナはトルコ人の統治・支配下に (セルジュークトルコ朝、~1099年)
1095年	東ローマ帝国のウルバヌス教皇が異教徒への十字軍呼びかけ、ユダヤ人ら異教徒が犠牲に
1099年	〈十字軍の統治時代〉 欧州から十字軍 (第1回) が来襲、エルサレム占領、エルサレム王国建設・統治 (~1291年)、ハイファ、アッカを攻略 (-1104年)、欧州の住民約3万人
1147年	第2回十字軍 (-1149年)、1189年第3回十字軍 (-1192年)、1202年第4回十字軍 (-1204年)、第5回十字軍 (1228-1229年)、第6回十字軍 (1248-1254年)、第7回十字軍 (1270)
1187年	エジプトのアイユーブ朝始祖サラーフ・アッディン (サラディン/クルド人1138-1193年) が十字軍を破り (ヒッテンの戦い7月)、エルサレム奪還 (10月)、1229年十字軍が再奪還、1244年イスラム教徒が再奪回 (アイユーブ朝サーレフ)、これ以降、エルサレムはイスラム教徒が673年間支配 (-1917年)
1258年	モンゴル軍がバグダッド入場、アッバース朝カリフを殺害、アッバース朝滅亡
1291年	十字軍領エルサレム王国消滅、エジプトのアラブ王朝マムルーク (1250-1517) バイバルスがシリア遠征 (1268)、十字軍の支配するパレスチナのヤッファなど攻略、支配 (~1516年)、モンゴル軍も撃退、パレスチナはアラブ人とユダヤ人との対立もなく比較的平和に推移
1299年	オスマントルコ帝国が小アジアに興る (1299-1923)
1453年	オスマントルコ帝国メフメト2世コンスタンチンノーブル奪取 (5月29日)、東ローマビザンツ帝国 (395-1453) 滅亡
1516-17年	〈オスマントルコの時代〉 オスマントルコ帝国セリム1世 (1512-1520) がイスラム・中東の主導権をめぐってライバルのイラン・サファヴィー朝 (国教シーア派、1501-1736) と抗争、チャルドランの戦い (8月) で破り、さらにマムルーク王朝を転覆 (ライダニーヤの会戦-1517年)、エジプト、シリア、イラクを支配下に、スレイマン大帝 (1520-1566) 時代に最盛期に、ユダヤ教徒は信教の自由を享受 〈概説〉これ以降、パレスチナはシリア、エジプトとともにオスマントルコ帝国の支配下に置かれ、1922年に国際連盟の英委任統治まで406年間トルコの統治時代に。 1880年のパレスチナ人口は48万人、アラブ人45万6千人、ユダヤ人2万4千人 (全体の5%)。ユダヤ人のパレスチナ移住は1881年の第1波から増え始め、1914年ごろには6万人 (全体の11%) に。この間、欧州に移住したユダヤ人は、領土を有さないディアスポラ (流浪) の民として周辺社会に同化する歴史を歩んできたが、「民族宗教」の有する特異性などのため他の民族との緊張関係を生み出した (ユダヤ人問題)。 19世紀の欧州民族主義=国家の時代を受けてユダヤ人もこうした同化主義から自決主義へと民族の運命を方向転換 (シオニズム)、父祖の地パレスチナへのユダヤ民族国家の建設を強行的に着手した。しかし、パレスチナを長年占有してきたアラブ住民=パレスチナ人による絶対的な抵抗に遭い、パレスチナ民族主義を招来、彼らの自決権を蹂躪して原住民を犠牲にした「パレスチナ問題」が発生した。